

1654年には、日本黄檗宗の開祖である隠元が招かれ、第四代住職となりました。隠元は、インゲン豆や煎茶などを中国から日本にもたらし、日本の文化に



興福寺本堂。  
本堂前部の柱は原爆の爆風の影響で  
みん少し湾曲している

多くの影響を与えました。境内には大雄宝殿のほか、旧唐人屋敷門や興福寺鐘鼓楼、興福寺三江会所門などがあります。興福寺三江会所門に関しては、放し飼いの豚が門内に入らないように、敷居が高く設けられている点が印象的でした。

(田中羽菜)

#### ◆ちゃんぽんミュージアム

長崎の名物「ちゃんぽん」の魅力と歴史を学ぶために、ちゃんぽん発祥の店である四海樓が運営するミュージアムを訪れました。ミュージアム内では、ちゃんぽんの歴史や文化に関するさまざまな興味深い資料が展示されており、展示物は写真も撮ることができました。また、四海樓とミュージアムが入った建物は、外観も立派で、長崎の食文化の奥深さを感じることが出来ます。残念ながら、私たちが行った時間帯は館内での食事提供が終わっていたため、実際にミュージアムに隣接する四海樓でちゃんぽんを食べることはできませんでしたが、近くのグラバー通りにある「長崎レストラン「マリア館」」で、みなで本場のちゃんぽんをいただきました。野菜たっぷりスープも濃厚、とても美味しく大満足でした。

(加藤 瑠来)

#### ◆長崎孔子廟

長崎孔子廟は、1893年に清国政府と在日華僑が協力して建立したもので、中国の山東省曲阜にある総本山と同じくらい建物の随所に壮麗な伝統美を凝らした、日本で唯一の本格的な中国様式の霊廟なんだそうです。



長崎孔子廟の正門。  
正門脇には伝統的な形式で  
石碑が配置されている

中国では赤は縁起が良い色とされているからか、外から見ても、中に入っても赤い建物や彩灯が所々にあったのですが、「色が眩しい！」といったことはなく、寧ろ正面から見ると配置が左右対照的であったり、建物は色落ちがあつたりと、孔子廟の長い歴史や日本とは違った異国の祭祀の様子を感じられる空間でした。入り口から少し進むと、72人分の孔子の弟子である賢人の石像が左右に並んでいました。よく見ると衣装や仕草、表情が全部違って細かく彫られており、一人一人の表情を観察するだけで1日が終わってしまいうでした。

(小谷慶太)

#### ◆グラバー園

長崎のグラバー園は、スコットランド人貿易商トーマス・グラバーの邸宅を中心とした観光施設です。園内には当時の洋風建築がいくつも残されており、日本と西洋の文化が融合した異国のような雰囲気がかもし出されています。夕日に照らされた園内と、陽が落ちてからの園内ライトアップで、時間によって異なる風

景を楽しめました。とくに上から見下ろす長崎港の眺めと夕日はとても綺麗で印象に残っています。ドイツ・オランダでかかるような曲調の音楽も流れていて、わくわくするような場所づくりがされていると感じました。歴史が好きな人、異国感を国内で味わいたい人にはとてもおすすめの間所でした。

(堀越翔)



グラバー園内の建物2階から見える夕日



夜のグラバー邸。  
グラバー園の開園時間は長いので  
いろいろな景色をみる事ができた

#### 中林ゼミナール

### 横浜中華街関帝廟参拝体験記

国際日本学部 国際文化交流学科 中林 広一  
国際日本学部 国際文化交流学科 2年 田畑 案吏・菱沼 朱

国際日本学部国際文化交流学科は4つのコースから成り立っている。そして、各コースでは2年次に演習系の科目である「コース演習Ⅰ・Ⅱ」を配当している。学生は3年次のゼミナールにて自身の関心に沿って学んでいくが、本科目はその前段階において必要とされるトレーニングを行うことを目的としている。その内容はコースごとに異なっているが、筆者(中林)の所属する文化交流コースでは校外学習を実施している点に特徴があり、今年度は関帝廟・東京ジャーマイ・印

刷博物館に学生を引率した。

これらの施設は異文化理解や多文化共生といった本コースのテーマを踏まえたものであり、かつ担当教員の専門に関連する施設が設定されている。筆者は例年横浜中華街にある関帝廟を訪れることにしているが、この関帝廟について施設見学に参加した学生がその概要をまとめてくれたので、以下紹介を行ってみたい。

（中林）

#### ◆関帝廟について

横浜関帝廟は横浜港が開港して間もなくの1862年に1人の中国人が関羽の木造を抱き、小さな祠を建てたのが始まりとされる。

1886年に初代の関帝廟が建設されたが1923年の関東大震災により関帝廟は倒壊した。中華街も甚大な被害を受けた。生き延びた人々は関西に避難し、また広東や上海に帰国する者もいた。街の復興により1925年の秋には中華街復興のシンボルとして2代目の関帝廟が再建された。だが1945年の5月29日に第2次世界大戦中のアメリカ軍による横浜大空襲により関帝廟は消失した。1947年の初夏に古材を利用して3代目の関帝廟が完成した。しかし再び厄災に見舞われ、1986年の元旦に原因不明の火災により消失した。このとき、関帝廟に祀られていた関聖帝君、観音菩薩、地母娘娘の像は奇跡的に無事であった。4度目の再建では横浜関帝廟再建委員会が組織された。中国本土出身の建築士と大工職人が選ばれ、装飾品や建築資材は可能な限り中国から輸入された。関帝廟入口両側にあるのは北京より輸入された4・5トンの重さがある雲龍石で一枚岩から彫り出したものである。また東京、横浜、大阪、神戸に住む2000人以上の

華僑が力を合わせて6億円の資金を集めた。それまでの関帝廟は中華街の裏通りに建てられており、参拝者の多くが地元の華僑であったが4代目の関帝廟は地元の人だけでなく横浜を訪れる人も気軽に足を運べるように現在の場所に移った。そして1990年の8月14日に現在も続いている4代目関帝廟は開廟式を迎えた。

150年の歴史を持つ横浜関帝廟は儒教・仏教とともに中国の3大宗教の1つであり民間で信仰されてきた道教の寺院である。道教の原型は不老長生の願いと無為自然を中心とした道家思想である。そのなかで時代とともに卜占や五行思想、医術、さらに儒教と仏教の倫理や儀礼も融合して現在の道教が成立した。

道教は民間から様々な神を取り入れている多神教であり最高神は玉清原始天尊を中心に上清靈宝天尊、太清道德天尊の三清である。しかしそれとは別に民間では最高神は玉皇上帝と見なされている。もとは三清を補佐する四御と呼ばれる四神の一柱であり唐の時代以前では道教のなかで玉皇上帝の地位は高くなかった。しかし宋の時代になると道教信者で有名な真宗が玉皇上帝を奉り、宇宙の支配者としての地位が確立した。玉皇上帝は人間の行為の善悪から翌年の運勢を決めるため人々は恐れ、敬った。また老天爺や玉皇爺とも呼ばれている。

唐の時代では日本に仏教だけでなく道教も受け入れるよう圧をかけていたが道教は広まらなかった。しかし道教から輸入された神々や風水思想、節分の文化など道教が日本に与えた影響は大きい。

横浜関帝廟では五柱の神様が祀られている。本殿内部の天井は玉皇上帝が住んでいると言われる天空を拝むように仰ぎ見るドーム状の形になっている。主神で

ある関帝聖君は三国時代の武将、関羽が神格化されたものである。彼は張飛とともに、蜀を建国した劉備と義兄弟の契りを交わし、呂蒙の計により58歳で処刑されるまで忠義と貢献を尽くした。その誠実さから商人や実業家から厚く信仰され、現在まで商売繁盛と富を繁栄する神として崇められている。本殿中央に関帝聖君の像が置かれており、その左には関羽の従者であった周蒼將軍、右には養子であった関平將軍の像がある。他にも健康や多産の守り神で救いを求める者に慈愛と調和をもたらす観音菩薩。玉皇上帝と同じ四御の一柱で一般的には后土娘娘、または后土夫人と呼ばれる地母神で長命・多産・災害の保護を象徴する地母娘娘。土地公と呼ばれる村や地域の陰陽にわたる守り神として知られる自然神で土地の豊作を与えるばかりではなく商人や鉦夫、漁師から崇められ、財福を与える福德正神が祀られている。（田畑）

#### ◆参拝方法

関帝廟での参拝方法は日本のお寺や神社ではないようなものである。まず、本殿に入りたいならば、入る前に受付にて500円で売っているお供え物の線香を買う必要がある。しかし、本殿に入らずとも礼拝をできる形式も取っている。買った線香をそれぞれの神様の香炉に1本ずつ順番に焚いて、その煙を浴びる必要がある。

本殿での礼拝の仕方は、日本のお寺や神社ではすることはない、跪いて礼拝する方法を取っている。また、本殿内にも礼拝をする神様の順番があり、それに従わなければならない。跪いた後に三回礼をし、住所、氏名そして生年月日を心の中で唱える。その後、お願いをし、最後に一礼をする。

気を付けて  
いただきたい  
のは、お願い  
の仕方であ  
る。日本のお  
寺や神社で  
は、ぼんやり  
とした願ひ事  
でも問題はな  
いが、関帝廟  
では、それで



香炉に線香を供える

は効果はない。その対象となる人やもの、そして場所、時間など細かく具体的に神様に伝える必要がある。そうすることでようやく神様が何をどうしたらいいのかなどが分かり、願ひ事を叶えてくれるという。

#### ◆おみくじについて

ここでは神様に願うのではなく、神様に願ひが叶うか聞くという方式を取っている。そして、その質問の神様からの答えがおみくじの運勢としてでる。そのため、神様に願ひが叶うか聞いた後におみくじを引くという流れになる。

おみくじの引き方は、日本のお寺や神社とはまた違っており、籤桶（セイチエン）と呼ばれるおみくじの棒が入った筒を一本のおみくじが飛び出すまで振り続ける。そして、その飛び出てきたおみくじで本当に良いのか再度、神様に確認しなければならぬ。

その方法は、神筈（しんばえ）と呼ばれる三日月型の神具が二つでペアになっているものを床に落とし、そこで表と裏で出てきた場合はおみくじはそれで適切であるという意味になる。

裏と裏または、表と表が出た場合はおみくじの棒を引くところからやり直し、表と裏が出るまで繰り返す。もし、これが三回やっても成功しなければ、その日は運勢が悪いため違う日に改める必要があるという神様からのお達しを意味する。

無事、神筈での作業がうまくいった場合は本殿内の入口近くにあるカウンターまで行き、出てきたおみくじの番号を伝えると紙のおみくじを受け取ることができる。

日本のお寺や神社のように、出てきたおみくじを結ぶ場所は関帝廟にはないため、そのまま持つて帰るか、金紙という神様への金銭の献上に使われるものを燃やす炉で、おみくじも一緒に燃やすことができる。

関帝廟のおみくじは、全部で六種類あり、大吉、上吉、上上、中吉、中平、下下とある。

私がおみくじを引いたときは中平が出てきて、財産や功名、縁談、旅行などがあまり良い結果ではなかったため、炉で燃やした記憶がある。この紙のおみくじには表面に日本語で、裏面には中国語で書かれていた。

私は、これらのことから日本の神社との違いを多く感じた。まず、神社では神様の姿を直接目にする機会は少ない。それに対して、関帝廟では、天空に住む玉皇上帝以外の神様のご神体があるため、そこが新鮮な部分だと感じた。

また、礼拝の際に生年月日を伝えるところも道教のお寺である関帝廟ならではの考えた。神社では、自分の名前と住所を伝えることはあるが、生年月日を伝えるということはめったにない。そのため、道教では生年月日は重要なものだろうと考えた。しかし、生年月日はその人を特定する基本情報としてではなく、その人の運勢を占うための素材として使われてい

ると知り、関帝廟での礼拝とおみくじの関係性の強さを感じた。

一般的に神社では、願ひ事とおみくじの運勢にはあまり強い関係性はなく、おみくじはただの運勢占いという印象である。ここまでおみくじの立ち位置が違うことは実際に行つて経験してみないと気づけない点だと思つたので、今回のコース演習で関帝廟に行けたのは良い機会だったと感じている。  
(菱沼)

以上が校外学習に参加した学生による体験談である。そこから見えてくることは、関帝廟での参拝方法が私たちになじみの深い神社や寺院でのそれとは大きく異なっている点である。神に祈るといふ行為は共通するものの、自身の個人情報や神に具体的に示さねばならず、また願ひ事も極力具体的な内容として伝えなければならぬ。これは道教の持つ現世利益の性格に拠るものである。このようにギャップを知る機会は、私たちの感覚に刺激を与え、視野を広げるものでもある。その意味においてこの経験は学生にとって意義のあるものだと見えよう。

昨今、日本社会には国外から多様な文化的・社会的バックボーンを持った人々が訪れているし、今後もその傾向は続くと考えられる。それは留学生や観光客、あるいは移民と様々な形での来訪となるが、これらの異なった文化・言語をバックボーンとした人々と対峙しつつ、社会を維持するためにも、異文化の論理・価値観を把握し、より柔軟なものへの捉え方ができるようになることが求められる。さらには、これらの人々と円滑なコミュニケーションを成立させ、多文化共生社会を作り上げるための努力も必要とされるようになる。今回のような機会は学生にとってそうした意味で

も良い契機になったと考えられる。

(中林)

参考文献・サイト

- 野口鐵郎他編『道教辞典』平河出版社、1994年
- 二階堂義弘『中国の信仰世界と道教 ―神・仏・仙人― 吉川弘文館、2024年
- 茶と猫と。「日本の神社とは違う関帝廟のおみくじ」  
<https://ameblo.jp/chasaji-b/entry-11760052522.html>  
(2025年7月18日閲覧)
- ハマのくま横浜散歩「横浜関帝廟のご利益は？おみくじ・お守り・場所・歴史や見どころを知って訪れよう！」  
<https://hamakuma3.com/yokohama-kantei-temple/>  
(2025年7月18日閲覧)
- 横浜観光情報「横浜関帝廟」  
<https://www.welcome.city.yokohama.jp/spot/details.php?pbid=807>  
(2025年6月18日閲覧)
- 「横浜関帝廟」<https://yokohama-kantei-temple.com/>  
(2025年6月24日閲覧)

夏ゼミナール

食を通して異文化を読み解く

外国語学部 中国語学科3年

厚澤 悠子・安齋 結捺・池田 美嘉・小松 かおり

増田 帆香・三田 裕花・横山 莉央奈

今回のゼミ活動では、「本格中華を学ぼう」というコンセプトのもと、中華料理のちまき、麻辣拌（マールラータン）、酒釀小丸子（白玉団子入りの甘酒）を作りました。

麻辣拌は、辛くてシビれる味が特徴で、中国で人気料理の一つです。最近日本でも話題の「麻辣湯（マールラータン）」のスープなしバージョンです。野菜、お団子、肉、麺など、好きな具材を特製のタレに和えるのですが、タレを作っているときに広がる唐辛子やニンニク、ごまの香ばしい香りに、みんなワクワクしながら作業を進めました。初めて食べた人は「辛いけど美味しい！」とハマる人もいれば、「辛すぎてやっぱり無理!!」と本場の辛さに驚く人もいて、すごく盛り上がりました。



麻辣拌 (汁なしマールラータン)



麻辣拌のタレ作り

ちまきは、旧暦の5月5日「端午節（端午の節句）」が近かったこともあり、チャレンジしてみました。「端午節」は、「春節」、「中秋節」と並ぶ中国三大伝統節句の一つです。ちまきは中国語で「粽子 (zongzi)」といい、北方の味付けが甘く、南方が塩味という違いがあるようです。

今回私たちが作ったのは北方のちまきで、もち米や具材（小豆、ピーナツやナツメなど）を笹の葉に入れて包み、一から手作りました。人生初のちまき作りは笹の葉の隙間から具材が出ないように結ぶことに苦戦しました。みんなで試行錯誤しながら作って楽し

かったです。

出来上がったちまきに砂糖をつけて食べることに驚きましたが、ほんのり甘くて、おはぎのような味わいで、美味しかったです。これまで食べたことがあった、豚肉、たけのこ、椎茸などの具材が入ったおこわ風のちまきとの違いを実際に作りながら体験できて、とても良い経験になりました。



ちまきの出来上がり



ちまき作り奮闘中

酒釀小丸子は中国式甘酒に小さめの白玉団子、ナツメや枸杞（クコ）などを入れて煮込む中華デザートになります。中国では家庭ではもちろん、結婚式や赤ちゃんの生後1か月を祝う「満月酒」など、大人数の宴会の最後に出されるデザートの一つでもあります。特に南方出身の人にとっては、小さい頃から親しんでいる味になります。今回のゼミ活動でも最後にこの酒釀小丸子を作りました。小丸子（白玉団子）も上新粉からみんなで一緒に作りました。それを中国式甘酒と一緒に水で煮て作ります。ほんのり甘く、少しお酒の風味がするのが特



酒釀小丸子